

## ■何もかもつまらなくて。何となく死にたい■ ～条件付きの愛に支配される子どもたち～

関東近県の地方都市に住む23歳のフリーター。特に非行歴もない普通の子。  
大学を中退し、現在は不定期のアルバイトをしている。両親は共働きで、週末以外は、夜もひとりで食事することが多かった。

- 仮名：山口さん
- 年齢：23歳
- 性別：男性
- 問題：自殺

### 【自尊感情の欠如と孤独感】

両親とは、日常会話くらいは交わすが、昔から、学校や勉強、友達のことについて、両親と親しく話し合うということはないし、両親も聞いてこない。大学に入学したころは、将来のことについて真剣に考えたこともあった。オシャレすることが好きだったので、ファッション関係なんかいいなあ、と漠然と考えていた。

しかし、そのうち、そんなことはどうでもよくなるようになった。将来のことだけでなく、何もかもが、むなしく、「かったるい」と感じるようになっていた。学校に行っても楽しくない。友達としゃべっても、違和感がある。家でも両親は留守であることが多いし、帰宅しても、すぐに自分の部屋にこもる。その頃になると両親のことは家族というよりも、単に「同居している大人」というふうに、冷めた眼で見ている。

### 【生きる意味を求めて】

彼は毎日、どこかで、何かが劇的に変わることを期待していた。そんなある日、ふとした、つまらないきっかけで母親と言い争いになった。その日は、いつもより早く目が覚めたが、なぜか学校に行きたくなかった。布団の中でグズグズしていると、働きに出る母親が部屋に入ってきた。「早く起きなさい。何時まで寝てるのよ」「今日は行きたくないから、バイト休む」「何言ってるの！さっさと起きなさい！」「何なんだよ！人の気持ちも知らないくせに」

母親の怒った声を聞いて、何かが吹っ切れた。とりあえず、着替えて鞆を手にとると、駅まで行き、学校とは逆方向の電車に乗った。行き先は決めてなかったが、何となく東京に向かっていた。その日は、マンガ喫茶で一夜を過ごしたが、衝動的に飛び出してきたため、お金もなかった。「もう家にも帰れない。後戻りはできない」と思うと、すぐに「死のう」と決心した。東京の繁華街を歩きながら、「どうやって死のうか」をずっと考えていた。新宿まで来て、いつかテレビで見た歌舞伎町にある駆け込み寺のことを思い出した。「ああ、あの男の人だったら何とかしてくれるかもしれない。どうにかしてくれるかもしれない」ネットで調べて、彼は駆け込み寺を訪れた。

### 【特になにもしない】

「それで、何をしたいんや？」「だから死にたいんだって」その若い男は自分からここに来たくせに、何故かふてくされた態度だった。「それじゃあ、なににしにここきたんや？」「だから、おじさんだったら何とかしてくれるかもしれないと思って……」

何とかしてくれと言われても、自分が何もしたくない人間を何とかすることなどできるわけがない。しかし、彼はここへ来た。若い男の魂は、救いを求めて駆け込み寺に来たのだ。俺はとことんまで彼の話を聞く覚悟を決めた。黙ってじっと見つめる俺を、彼は潤んだ目でしばらく見つめた。俺は心を空っぽにして、さらに男を見つめ続けた。やがて彼はうつむいて泣き出した。俺はティッシュペーパーを手渡し、さらに待った。泣き止むと、ぼつぼつ話し始めた。その言葉には必ず、「なんとなく」とか「だから」「～とか」がつく。俺が何か質問すると、必ず「だからあ」から言葉が始まり、語尾が「とかあ」である。男は「だから」という言葉で初対面の私に対して同化する事を求め、「とか」「なんとなく」という言葉で物事を曖昧にする。俺は彼と真正面から相対し、妥協を許さず本音を丸裸にしていった。彼の本音は「寂しい」であり、その気持ちを強く押し込めるため、周りにも溝を作ってしまう、孤立感をさらに深めた。



毎週火曜日と木曜日に行われる、新宿歌舞伎町「ク  
リーンアップ隊」の集合写真。

### 【ここが POINT】 .....

彼もしゃべっている間に、やっと自分自身の心の中がわかったようだ。彼は帰っていった、自分の家に。俺はなにもしなかった。それで彼には十分だったからだ。

特に、差し迫った大きな悩みがあるというわけではないが、何となく現状に不満で、将来が不安で、生きるのがつらくて、だから死にたい、というのが多くなってきたように思う。物質的には、満たされていて、心が満たされていない。心が空虚なのだ。だから、何となく生きるのがイヤとか、もう疲れたとか、人間は、いくら物質的に満たされても、心が満たされないとダメな生き物。モノがあふればあふれるほど、人間は満ち足りることを忘れ、貪欲に、永遠に必要でない何かを求め続ける。この無間地獄から脱出するための唯一の方法は「足るを知る」という事だ。欲望に己を任せず、少しだけでも我慢を試してみる。我慢というものは、意外に気持ちがいいものなのだ。